



山崎氏書
鏡

山

28
4340
4



4340
4
特

繪本黄金輔四之卷

去つて... 後室... 武蔵... 河内... 殿... 五楼... 河内... 此やん... 此たのち... 是しく...
(Small handwritten annotations in various colors are interspersed throughout the main text.)



掃
木
金
助

奇
平



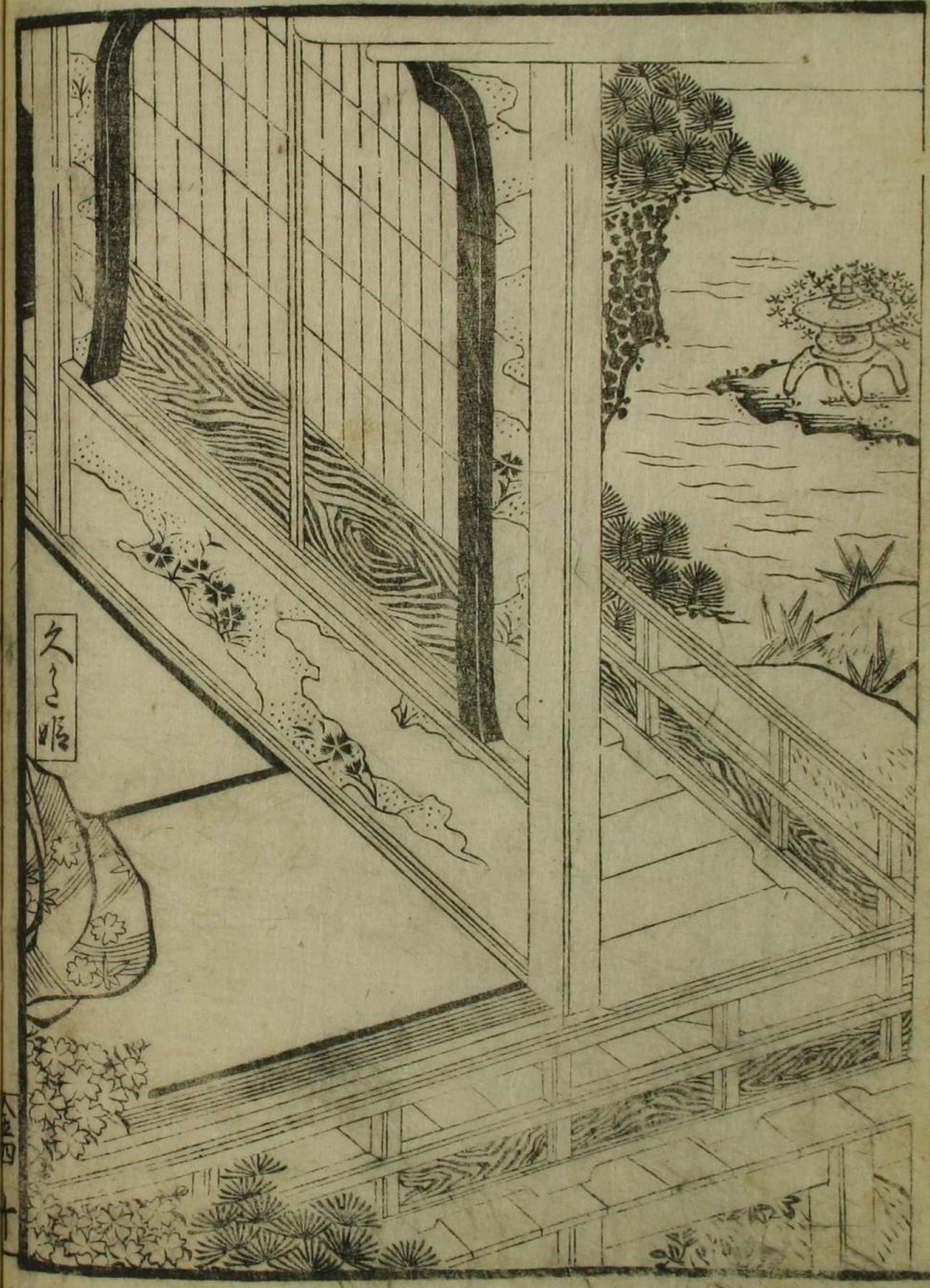
母はよらめられぬ上へ武士のさだはるあてよ介くは大名へ嫁せよと仰あつて
さめどと世の中その内は後家なる客の御状表向を病者と仰り嫁へてらるの
因はまづくおめとぬぐひ後せよと仰りお嫁へまうすて振子とぬぐひ女ぶつひの
お身などおもて御さる入申すもい付る男懸ひせやく抱さるるもお侍
付梅おのたのこよつてももるらるりてく現在殿の御傍に候ふもふらる
やうよらめむは人よ少き系のは付のおやまはま年も付候てと仰り
あよめひげあふ今の侍を御めと仰りてのほらるるは年日の過ぎる
はくしのぶくと御抱きもぬぐひ申すもい付る男懸ひせやく抱さるるも
お身などおもて御さる入申すもい付る男懸ひせやく抱さるるも
よてもお身などおもて御さる入申すもい付る男懸ひせやく抱さるるも
眼裏方々へ御抱きもぬぐひ申すもい付る男懸ひせやく抱さるるも

「は履けて暮ふ」
「未春と坊の二世の盃」
「運の臺で梅とげ」
「ハテ何のうらうら」
「それでもよも月を」
「武士の娘は似合ぬ未練を」
「ア、どうしてさうさうお」
「お肉と山分めのせ乳産とをられて女と係縁を二十サ」



新魚

茶



久之

